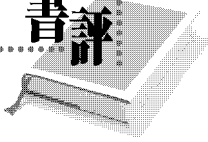


書評



洲脇寛 監訳

モーズレイ 実地精神医学ハンドブック

青木省三

本の紹介に入る前に、訳者の洲脇寛先生のことを記したい。洲脇先生は私が研修医だったころ、その大学病院精神科の病棟医長をされており、私にとっての精神科医の最初のモデルであった。

ある時、急性期の患者さんが離院しようとしてしまったのか、閉鎖病棟から勢いよく走り出てきた。それに気づくと、彼はさっと駆け寄り、ふんわりとしかしガッチリと抱きかかえたのだ。そのシーンは私の記憶に今もしっかりと刻まれていて、臨床家のあるべき姿として事あるごとに蘇ってくる。患者さんの意思に反した強制はできる限り少なくしたい。しかし、治療を引き受けた以上、責任を持って治療にあたらなければならない。矛盾した思いであるが、しかし毅然として両立させる。傍らで呆然と立っていた私とガッチリと抱き止めた洲脇先生。その一瞬は私に多くのことを考えさせた。

本書を生み出したモーズレイ病院は、経験主義、実証主義、実用主義が貫かれているイギリスを代表する精神医学の研修機関であり、研究機関である。そして、訳者の洲脇先生の学ばれたところでもある。著者の一人ゴールドバーグ教授と洲脇先生はその臨床の姿勢に共有するものがあり、その上に、本書は成り立っている。

本書は精神科医になるものであれば、誰もが知っておかなければならないことが、きわめて広範囲に偏りなく記されている。同時に、上述したような、我々が学ぶ価値のあるイギリス精神医学の特徴もしっかりと記されている。

たとえば、サマリーとフォーミュレーションの違い。前者は、客観的な情報を偏りなく記し

たもので、A4紙の両面に収まるほどの量であり、症例を知らない第三者がこれを読むだけで本質的な問題点を把握できる。後者は、精神医学的診断に至った発症様式、主な症候、鑑別診断、病因、そしてそれを基にした今後の治療計画、予測される予後などをまとめたものである。前者には客観的な情報の要点が、後者には臨床家の思考過程が記されるものである。

しばしばハンドブックと称するものは味気ない。しかし、このハンドブックは違う。臨床のエッセンスが凝縮しており、噛めば噛むほど味が出るスルメのような本なのである。本書は、一度読み終えたら本棚に置いておくというものではない。さまざまな疾患や場面での質問すべきこと、把握すべきこと、対応や治療の留意点が簡潔に記されており、臨床の際にいつもポケットに入れておき、必要な時にその項目を読むのがふさわしい。本書の一文によって、考えを整理したり、考えを広げていったり、また、対応を決断したりと役に立つ。

それは、本書が大きな教科書をコンパクトにまとめるという発想からできたものではなく、その逆の方向から、すなわち多くの精神科医が臨床現場で悩み、困り、考えた経験と知恵を凝縮させていくという発想からできたものだからだと思う。臨床の現場で生まれた本だからこそ、本当に臨床に生きることが書かれているのである。本書を平易で簡潔な日本語に訳された洲脇寛先生の労に改めて感謝したい。

(川崎医科大学精神科学)

●B6変型判 283頁 2005 定価3,990円(本体3,800円+税5%) 新興医学出版社